

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370109

研究課題名(和文) メーイ(1519-94)の芸術理論：音楽理論とアリストテレス『詩学』解釈の融合

研究課題名(英文) Where Aristotle's Poetics Met Ancient Theory of Music: Girolamo Mei's Aesthetics

研究代表者

津上 英輔 (TSUGAMI, Eske)

成城大学・文学学部・教授

研究者番号：80197657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：メーイ(Girolamo Mei)は、西洋世界でそれまで不思議に交わることのなかった古代音楽理論の伝統とアリストテレス『詩学』の伝統とを初めて結び合わせた。すなわち、彼は独自の解釈によるギリシャ旋法理論を、『詩学』に見られる古代悲劇の強い情動喚起作用の説明手段とすることで、両者の融合を成し遂げた。その際、厳密な『詩学』解釈から導き出された彼の「ギリシャ悲劇は全篇歌われた」とする解釈が両者の橋渡しとなった。一連の解釈を経て、彼は当時一般的であった制作論とは趣を異にする効果の美学に到達することができた。

研究成果の概要(英文)：Girolamo Mei (1519-1594) was the first scholar to combine the tradition of ancient music theory and that of Aristotle Poetics, which two had strangely remained unrelated to each other up to his time. He achieved this combination by interpreting the striking emotional effect of the Greek tragedy upon its spectator, as was known from the Poetics, based on what he understood as the Greek theory of the modes. This presupposes one more interpretation, that is, the view of the ancient tragedy as sung from beginning to end, which he concluded from his close analysis of the Poetics. The result was his modern aesthetics of effect, as opposed to the prevalent poetics.

研究分野：美学

キーワード：メーイ, ジローラモ アリストテレス『詩学』 プトレマイオス『調和論』

1. 研究開始当初の背景

イタリアの古典学者ジローラモ・メイ (Girolamo Mei, 1519-1594) は、古代における音楽実践と音楽理論について直接古代の文献から研究した結果として、古代音楽は単旋律的であったという結論を、そしてアリストテレス『詩学』の文献学的研究の結果として、古代悲劇は終始歌われる全面音楽劇であったという結論を得た。それはまず『古代旋法論』(De modis, 1567-73)で表明され、後年ヴィンチェンツォ・ガリレイを通じてフィレンツェの文人グループ、カメラータに伝えられた。このグループの古代悲劇復興の試みは、やがて最初のオペラ『エウリディケー』に結実した(1600年)。メイはこの一連の動きの源泉に位置することで、西洋音楽史に名を留めている。

その中で、メイが古代音楽理論の何をどのように理解したか、そして彼が『詩学』のどの箇所をどう解釈したかの詳細については、これまでのところ、十分な研究が尽くされていない。

2. 研究の目的

本研究の課題は、そのようなメイの文献解釈活動そのものを正確に見極めた上で、それを思想史と美学史の大きな流れの中に位置づけることにあった。すなわち、古代音楽理論、とりわけプトレマイオスを代表とする旋法理論は、ポエーティウスを通じて西欧世界にもたらされ、中世からメイの時代まで連綿と発達を続けた一方、アリストテレス『詩学』は、1498年のジョルジョ・ヴァッラによるラテン語訳刊行によって事実上初めて西欧の知的世界に紹介された後、まずイタリアで陸続とギリシャ語テキスト、近代語訳、注釈が現われ、大きな流れを引き起こした。

これら2つの伝統は、今日の目からすると、どちらも音楽と詩に関わるという意味で芸術論であり、互いに参照し合って新たな発展につながって当然と見えるのだが、おそらく各々の属する研究領域の違い(一方は中世以来の artes liberales, 他方は新時代の人文学)から、交わることがなかった。その交わりを成し遂げたのがメイその人である。このことを文献学的に論証するのが本研究の目的であった。

本研究の第2の目的は、メイの学問的営為が、あくまでも客観的・中立的な古代文献の研究にあったのではなく、それを踏まえつつも、同時代の知的世界に一石を投ずる意図を内蔵していたことを明らかにすることであった。

3. 研究の方法

研究の具体的内容としては、まず第1年度の平成27(2015)年2月に刊行した単著『メイのアリストテレス『詩学』解釈とオペラの誕生』の中で、メイが『詩学』原文の厳密な分析を経て、古代悲劇は全面音楽劇で

あったという上述の結論を得るまでの過程をたどり、それが1つの正当解釈であることを証明した。それに続き、これまで視野の中に入っていなかった、未刊のメイ著音楽理論関係論考(Trattato di musica および De nomi delle corde del monocordo)を対象として、『古代旋法論』の理論が後年まで変わらず保たれていたかを検証した。ただしこの作業は本研究期間内に完了することができず、今後の作業に持ち越された。したがって、その成果は以下の述べる研究成果において、一部のみ盛り込むことができた。

4. 研究成果

研究は5篇の論文にまとめられた。以下に発表順にその内容を辿り、本研究のまとめとする。

第1に、「メイのプトレマイオス旋法論解釈」(2016年1月、『成城文芸』233・234号, pp. 97-124)(下の「5. 主な発表論文等[雑誌論文]5」)において、メイが『古代旋法論』において解釈するプトレマイオスのトノス体系は、オクターヴ種旋法と音高旋法の合体したものであり、現代から見ると、これが誤解であることをまず確認した。すなわち、彼は『古代旋法論』第2巻24ページのうち、半分以上に当たる14ページ(pp. 53-67)を、直接間接にプトレマイオスの旋法理論の解釈に費やしている。これは、手紙を含むメイの全著作において、断然最大のプトレマイオス理論解釈である。彼は翻訳と言ってよいまで忠実にこの理論を辿りながら、デュナミス(機能、階名)/テニス(位置、音名)の区別というプトレマイオス理論の最重要点を理解し損ねたが、これを最初に正確に理解したのはプトレマイオス『調和論』の初刊本(1682年)の編者 John Wallis であったと考えられるので、この誤解は無理からぬものと考えなければならない。

さて、このように理解された旋法は、オクターヴ種、音高の両面を備え、隣り合う旋法同士が1音(2度)でなく2音(3度)で隔たり、結果として旋法変化が2倍の音高変化をもたらすことになった。ところで旋法変化はオクターヴ種、音高のどちらの面でも聞き手の心を動かすが、メイが主たる情動喚起手段として語るのは、音高トノスの方である。すると、古代の旋法は特に大きな音高変化のゆえにこそ、聴き手への大なる情動喚起作用を有していたのだという結論に至る。メイにおける古代旋法理論と古代音楽の強い情動喚起作用の関係づけはこの解釈に基づいている。

第2の論文は「記述理論から規範美学へ：メイの旋法体系と古代音楽像」(2016年7月、『美学』248号 pp. 109-120)(下の雑誌論文4)である。ここでは、上述の古代旋法理論と古代音楽像の関係づけをメイがどのように説明し、その考えが歴史的にどう位置づけられるかに光を当てた。従来の研究で

は、上述のオペラ誕生に至る歴史的見通しからメイと『古代旋法論』を論じるものが多く、その結果、記述的 (descriptive) な音楽理論そのものを内容とする最初の3巻より、理想化され、それゆえ多少とも規範化された (normative) 古代音楽像を提示する第4巻を取り上げる傾きが強かった。しかしメイの古代音楽像は、彼独自の古代旋法理論解釈に確固として基づいている。すなわち彼の考えでは、旋律のおかれた音高とそれが喚起する情動の対応は「自然」そのものの計らいにより、それを人間の慣用が発展させたものである。この思弁的仮説はアリストテレス・コインティリアーノスとプラトーンの古代実践についての証言によって支持される。その結果、古代音楽の強い情動喚起力についての概略的ではあるにせよ、壮大な理論となった。

アリストテレス『詩学』がこの理論の触媒の役を果たした。というのは、メイは『詩学』解釈を通じて、古代悲劇において台詞が終始歌われると考えたが、その憐れみ・恐れ・カタルシスのような強い情念の喚起において音楽が決定的な役割を果たすと考えているからである。これを歴史的展望から見ると、メイはこれまで交わることのなかった数理的調和論の伝統とアリストテレス『詩学』に刺激された文芸批評の伝統とを、西洋の音楽史上、哲学史上はじめて繋いだと評価することができる。

第3の論文は「話す人を歌で模倣する：メイの古代悲劇像とペーリのレチタティーヴォ理論」(2017年3月、『美学美術史論集』21号, pp. 1-24)(下の雑誌論文3)である。現存最古のオペラ『エウリディーチェ』(1600年)の作曲家ヤーコポ・ペーリは、同作品への序文の中で、彼が全面音楽劇と理解した古代悲劇の復興のため、語りの連続的音高変化と歌の音程的音高変化との「中間物」として、新しい独唱様式(のちにレチタティーヴォと呼ばれる)を開発したと述べている。この問題についての唯一の先行研究者であるC. V. パリスカは、古代悲劇が全面音楽劇であったという理解とともに、この「中間物」の考えについても、メイを源とするという考えを表明しているが、本論文における手書き未刊を含むメイの関連全著述の綿密な検討の結果、それを証拠立てる材料はなく、「中間物」の観念はむしろ遠くポエティウスに由来すると考えられることが明らかになった。これらの研究論文3篇の結論から、メイが古代音楽理論の解釈とアリストテレス『詩学』の解釈という2つの伝統を結び付ける役割を果たしたこと、しかしその結び付けに、後年レチタティーヴォと呼ばれるものが含まれないことが明らかになった。

第4の論文“Two Centuries Ahead of Batteux: Girolamo Mei's System of the Arts” (e-book *Proceedings of ICA 2016*, Seoul National University, 2017, pp.

469-473)(下の雑誌論文2)および第5の論文「古代理論を近代思想に仕立て直す—ジローラモ・メイの芸術体系論—」(2018年7月、『美学』252号 pp. 13-24)(下の雑誌論文1)。は、1560年のヴェットーリ宛てメイの手紙に出現する芸術分類表を対象とし、それを芸術概念の歴史に位置づけることを試みた。この表は絵画、彫刻、詩、音楽、舞踊を含み、その他のものを含まない点において、約200年後のCh. バトゥの体系に等しい内容を持つ上、全芸術を「模倣術」として一括して、しかも同列に並べる点、バトゥを凌ぐとさえ言える体系性を備えている。

メイは分類表を、アリストテレス『詩学』第1章における「詩作の手段」論の解釈として提示しているが、そこには *chiaroscuro* や *rilievo* のような近代的美術概念が盛り込まれ、また韻文から区別された独立ジャンルとしての散文が立てられるなど、『詩学』理論の中立的・客観的解釈を超えて、メイの目から見て完結した1つの体系を打ち立てようとする意図が見て取られる。ここに、古代の理論項目を近代人の立場から完成させようとしたメイの基本姿勢がうかがわれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計5件)

1. 津上英輔、「古代理論を近代思想に仕立て直す—ジローラモ・メイの芸術体系論—」(2018年7月、『美学』252号 pp. 13-24). 査読あり。
2. TSUGAMI Eske “Two Centuries Ahead of Batteux: Girolamo Mei's System of the Arts” (e-book *Proceedings of ICA 2016*, Seoul National University, 2017, pp. 469-473). 査読なし。
3. 津上英輔、「話す人を歌で模倣する：メイの古代悲劇像とペーリのレチタティーヴォ理論」(2017年3月、『美学美術史論集』21号, pp. 1-24). 査読なし。
4. 津上英輔、「記述理論から規範美学へ—メイの旋法体系と古代音楽像」(2016年7月、『美学』248号 pp. 109-120). 査読あり。
5. 津上英輔、「メイのプトレマイオス旋法論解釈」(2016年1月、『成城文芸』233・234号, pp. 97-124). 査読あり。

(学会発表)(計4件)

1. 2017年3月20日第20回国際音楽学会 (IMS 2017 会場：東京) TSUGAMI Eske “Girolamo Mei Projecting the Image of Ancient Music in the Light of Aristotle's Theory of Tragedy and Ptolemy's System of Tonoi”
2. 2016年7月26日第20回国際美学大会大

- 会(ICA 2016 会場:ソウル)TSUGAMI Eske
“ Two Centuries Ahead of Batteux:
Girolamo Mei's System of the Arts ”
3. 2015年11月14日第66回日本音楽学会
全国大会(会場:青山学院大学)津上英
輔,「音楽理論から音楽美学へ:メイ
のプトレマイオス旋法論解釈と古代音
楽像」
 4. 2014年10月10日第65回美学会全国大
会(会場:九州大学)津上英輔,「メー
イのとらえた悲劇のカタルシス」

〔図書〕(計1件)

津上英輔.

『メイのアリストテレース 『詩学』 解釈と
オペラの誕生』(2015年2月, 勁草書房, 科
研費学術図書助成).

6. 研究組織

(1)研究代表者

津上 英輔 (TSUGAMI Eske)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号: 8 0 1 9 7 6 5 7